

なのはシングルエイジ期である。5章の小括では、「母子世帯の形態を取るメマーイ世帯で、なおかつ子が幼い場合には、子をより良く育て、扶養の負担を減らすための戦略の1つとして、子を他のボーン・ブォーン（親族）の世帯に移動させる事例が多く見られた」（pp.196-197 括弧は筆者）と書かれている。そこで評者は、表4.1「T村のメマーイ世帯の世帯構成」と照らし合わせ、表5.5「一時的な子の世帯間移動」のなかでシングルエイジ期の移動を確認した。評者の見落としでないなら、3事例しかないようであった。シングルエイジ期の子どもは、移動させずに近隣の親族によりケアされるほうが普通であれば、10歳以上の子どもの移動と同様に、そのような幼い子のケアのあり方についても詳しく知りたかった。

また、本書で明らかになった「メマーイが貧困に陥らない仕組み」は、アフリカ研究者としてアフリカ社会と比較すると、大枠でかなり共通点がある。たとえば、離婚後に親族と同居する、子どもや老親を親族間で移動させる、女性が参入しやすい仕事がある、などである。では、多くのアフリカ社会にはなくT村にある仕組みは何かというと、女性が男性と同等かそれ以上に、土地などの資源にアクセスできることだろう。しかし、このような女性にとって有利な慣習は、相続できる資源があつてこそ可能になる。すでにT村では、屋敷地が足らずに水田を屋敷地にすることが行われており、それほど遠くない将来、今のような土地の相続・分与が難しくなるだろう。また、著者も本書の最後に論じているように、村でぎりぎりの生活をしているメマーイや、村での生活をあきらめ都市に出る人など、「貧困に陥らない社会の仕組み」からこぼれ落ちるケースもある。このような人々も含め、今後もT村の「仕組み」を追っていくという著者の継続調査が楽しみである。

本書のコラムでは、「母」や「家族」をめぐる著者の葛藤が、カンボジアの人々とかかわるなかで癒やされたことがつづられている。著者のストーリーテラーの才が、今後の研究でさらに発揮されることを期待したい。

（平野（野元）美佐・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

松林尚志、『消えゆく熱帯雨林の野生動物——絶滅危惧動物の知られざる生態と保全への道』化学同人、2015、204p.

本書は、東南アジア地域の野生動物生態研究の第一人者による著作である。本書で扱われている内容は、大きく分けて3つある。まず第一に、著者が20年近くにわたって調査研究を続けているマレーシア・サバ州（ボルネオ島の北部）における野生動物の置かれた現状について語られる。サバ州では、生息地の破壊（とくにパルプ・プランテーションやアブラヤシ・プランテーションの開発）と密猟が大きな問題となっており、多くの大型野生動物が現在進行形で個体数を減らしているという。著者自身の研究についても詳述されており、とくにライフワークである「塩場」（動物が塩を摂るためにやってくる場所）の研究成果と、絶滅が危惧されているウシの仲間ボルネオバンテン（*Bos javanicus*）の系統学的解析結果が詳しく紹介される。続いて、著者が短期間、出張・調査したインド・タンザニア・ブラジルの野生動物の置かれた現状について述べられる。チンパンジー（*Pan troglodytes*）からアマゾンカワイルカ（*Inia geoffrensis*）まで様々な動物の最新の状況が紹介されており、個体数の減少の背景には共通性と相違性があることが実感できる。世界中の野生動物を広く見てきた著者ならではの内容であるといえよう。そして、最後に、世界中で進行する野生動物の減少・絶滅にどのように対処していくべきかが、これらの経験を踏まえたうえで具体的な事例に触れながら語られる。とくに生息域外保全の現状と課題、可能性について論じられる。最後に生息域外保全の内容を持ってきたのは少しばかり意外だったが、全体としてのバランスを考慮したのかもしれない。

一部教科書的な内容を含めるなど、野生動物の保管理に関わる広範な内容を扱う本書であるが、最大の魅力は、やはり第一のマレーシア・サバ州（以下、サバ）についての記述だろう。現場を知っている人の言葉はやはり、力強く、そして何より説得的である。加えて、著者のサバに対する「愛」が、本書をさらに魅力的なものにしているようにも思う。じつは、私は学生時代（約10年前）に著者

と調査地で一緒にさせていただいた経験があるのだが（というより、私が最初に熱帯雨林で調査を開始した時にお世話になった恩人なのだが）、当時から現地の野生動物だけではなく、サバの風土や人々に対して溢れんばかりの「愛」をお持ちだった。現地の人との著者の信頼関係の厚さは、海外調査が初めての当時の私にとって衝撃的でした。本書の語り口が生き生きとした魅力あるものになっているのは、サバという場所自体へのポジティブな感情が背景にあることは間違いないと思う。本書が野生動物の置かれた現状というどちらかといえば暗い題材を扱っていながら、暗さを微塵も感じさせない仕上がりとなっている理由かもしれない。

もちろん「愛」ばかりではない。本書で紹介されているサバでの研究成果は、基礎研究として興味深いだけではなく、実際の野生動物の保全管理に大きく資するものなのだ。例えば、塩場の研究についてもそうである。草食動物が、不足しがちなナトリウムを補うために、塩分を豊富に含んだ食物や水を好んで摂取することは古くから知られていた。しかし、とくに東南アジア熱帯ではほとんど研究されておらず、塩場をどのような種がどの程度の頻度で利用するかについては全くといっていいほど情報がなかった。著者は、自動撮影カメラを用いた長期間にわたる地道な調査によって、こうした基礎的な情報を収集することに初めて成功し、塩場が、絶滅の危惧される大型動物にとって非常に重要なハビタットになっていることを実証した。さらに、低密度で生息するオランウータンにとっては異性との出会いの場になっている可能性を示すなど、これまで誰も考えなかった塩場の生態学的な機能があることを明らかにした。野生動物の保全を進めるためには、例えば森林を商業伐採する場合でも、こうした重要なハビタットに配慮した伐採計画を立てるべきだろう。著者のすごいところは、研究成果を現地の森林局に伝え、塩場周辺環境の重点保護を森林管理の方針として採用してもらったという点だ。著者自身はあっさりと言っているが、基礎研究が、大きな社会貢献につながったお手本のような事例だともいえるだろう。

もう一つのバンテンの系統学的な研究も大発見をもたらした。ボルネオバンテンは、バンテン3亜種の中でも最も情報が少なく、家畜ウシとの交雑も疑われるなど、ボルネオバンテンという亜種の存在自体が疑われていた。しかし、著者らが行った遺伝解析の結果、交雑個体は確認されなかったばかりか、他のバンテン亜種よりも別種のガウル（*Bos gaurus*）に遺伝的に近いことが明らかとなった。熱帯地域に住む小型動物の系統上の位置が変わる動物は珍しいことではないが、バンテンのような大型ウシでもまだまだ未知のことが多いのだ。この研究は、一見したところ、基礎研究以上のものではないように見えるかもしれない。しかし、系統学的な解析によって種としてのステータスを決めることは、その種の保全ステータスを決めるうえで不可欠なものである。例えば、ボルネオバンテンが固有の種なのか亜種なのか、あるいは家畜との交雑があったのかどうなのかによって、保全活動の優先順位が変わってくる。もちろん交雑していたから、あるいは亜種だからといって保全する必要がないと結論づけてよいわけではないが、野生動物保全のための人的、金銭的、時間的資源が非常に限られている現状においては、固有性の高い種から優先して保全努力を注入する必要があるのは確かだろう。すなわち、著者の研究があるおかげで、バンテンの保全を緊急に進める必要があることを科学的に訴えることができるのである。

著者自身の体験に根差して野生動物保全・管理の現状が説得的に論じられていること、その語り口に著者の人柄が見事なまでに反映されているという2点が本書の魅力だと思う。類書がないという点でも、本書の価値は非常に高い。「野生動物を守りたい」「今ある生物多様性を失いたくない」「今の美しい姿を次世代に遺したい」という思いは、野生動物の研究を志す者、あるいは現役の研究者の多くが抱える感情であろう。しかし、実際にはどのようにしたらそれが実現できるのかが分からず悩んでいる人も多いに違いない。いい基礎研究をしたからといって、実際の問題を解決するわけでは必ずしもない。そうした「じれったさ」を感じている人に、著者の活躍ぶりは非常に参考になると思う。おそらく多くの読者が本書を通じて痛

感するのは、野生動物保全・管理を実際に勧めるためには、「いい研究」だけでは不十分であり、現地の人との信頼関係の厚さ、それを培うための人柄、そして現場を知るものだけが持つ言葉の力強さ、これらがあってこそ初めて可能になるものだという事だろう。本書の著者が、こうした魅力を全て兼ねそろえていることも、読めばすぐに分かる。もっとも、著者が近寄りがたいスーパーマンであるとはいいたいわけではない。著者の研究活動の原動力は、動物が好き、サバが好きという純粋な感情にあること、その原動力さえ維持すれば、おのずと結果が付いてくることを同時に本書は教えてくれるからだ。その意味で、本書は勇気をくれる書物でもある。

残念ながら、本書には、野生動物の減少・絶滅という世界規模で進行する難題にどう取り組んでいくべきなのかについての理論的な枠組みが提示されているわけではない。もちろん、本書にそうした内容を求めるのは筋違いなことだが、徹底して現場に立ち続ける著者だからこそ、先進国の野生動物管理と熱帯地域のそれは何がどのように異なるのか、熱帯地域に特有のアプローチがあるのかなのかについても理論立てて論じてほしいと思う。おそらく東南熱帯での経験が誰よりも豊富な著者は、すでにこれらに対しても答えをお持ちのはずだ。これらの点については、次の著作を楽しみにしたいと思う。

(中島啓裕・日本大学生物資源科学部)

宮脇千絵. 『装いの民族誌——中国雲南省
モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社,
2017, 372p.

本書は、2007年1月～2009年3月に中国雲南省文山壮族苗族自治州（以下、文山州）文山県で行った長期調査に基づいている。中国政府が公認する55の少数民族の一つであるミャオ族を対象とし、なかでもモン（Hmong）を自称する人びとの民族衣装をテーマとした民族誌である。民族衣装は伝統的、不変的なものとして捉えられる傾向があるが、著者はめまぐるしく変化するモン女性の衣装に着

目し、その変化の内実と諸要因を明らかにした。

本書を開いてまず目を引くのが、モンの民族衣装を写した約350枚ものカラー写真である。なかでも圧巻なのは、調査地の一モン世帯に属する女性3名の民族衣装、計233点の写真を製作年等の情報とともに整理している（口絵pp.16-53）。これらの写真から、モン女性の3世代にわたる衣装の変遷を確認することができる。衣装の撮影と並行して、サイズ・重量の測定と材料の同定も行った。また、確認するのが困難な衣装の製作年については、プリントアウトした衣装の写真をモン女性たちに見せながら、製作時の記憶をたどっていったと言う（pp.145-146）。著者によるモンの衣装への深い理解に基づき、忍耐強くそして真摯に衣装の変化の様相を捉えた点が、本書の第一のオリジナリティではないだろうか。もう一つの特徴は、衣装の変化をモンのサブ・グループ間関係を踏まえて分析した点である。文山県で人口の多いモン・スーが居住するK村と、モン・ジュアが居住するH村にて実施した調査から、門外漢では見過ごしてしまうサブ・グループ間の相互作用により生じた装いの変化を明らかにした。

著者自身が述べるように、雲南省文山県のモンの事例は、これまであまり記述されてこなかった民族衣装に内在する生き生きとした変化の過程を示すことを可能にしている（p.16）。一方で、本書が扱うのは民族衣装の変化の側面にとどまらない。第5章では、モン自身が変化を拒んでいる死装束の材料（大麻）についても述べている。本書は、モン女性による装うという日々の実践を、彼女たちの選択と規範を中心に、衣装の材料・技術の変遷、さらには生業の変化とサブ・グループ間関係を踏まえて明らかにしている。以下、各章の内容を詳しく見ていく。

西洋由来の概念であるファッションに関する先行研究は、非西洋の伝統的な衣服（民族衣装）を固定的なもの、不変のものとして捉えてきた。それに対し序論では、民族衣装をめぐる近年の動きを、先行研究に基づき整理している。まず、非西洋出身のファッション・デザイナーの出現に着目し、彼らが自身の民族衣装を改変することで、西洋のファッション・シーンに新風を吹き込んだこ